

正岡子規著「墨汁一滴」岩波文庫、岩波書店 1927年12月15日刊を読む

墨汁一滴

1. 病める枕^{まくら}辺に巻紙^{まきし}状袋^{じょうぶくろ}など入れたる箱あり、その上に寒暖計を置けり。その寒暖計に小^わき輪飾^{かざり}をくくりつけたるは病中いささか新年をことほぐの心ながら齒^し朶^だの枝の左右にひろごりたるさまもいとめでたし。その下に橙^{だいだい}を置き橙に並びてそれと同じ大きさほどの地球儀^すを据えたり。この地球儀は二十世紀の年玉なりとて鼠骨^{そこつ}の贈りくれたるなり。直径三寸の地球をつくづくと見てあればいささかながら日本の国も特別に赤くそめられてあり。台湾の下には新日本と記したり。朝鮮満州^{きつりんこくりゅうこう}吉林黒竜江などは紫色の内にあれど北京とも天津とも書きたる処なきは余りに心細き思ひせらる。二十世紀末の地球儀はこの赤き色と紫色との如何^{いか}に変わりてあらんか、そは二十世紀初^{はじめ}の地球儀の知る所^あに非ず。とにかくに状袋箱の上に並べられたる寒暖計と橙と地球儀と、これ我が病室^{ぼうしつ}の蓬萊^{ほうらい}なり。

枕^{まくら}への寒さ計りに新年の年ほぎ縄を掛けてほぐかも

(明治三十四年一月十六日)

P7

2. 今は東京の小学校で子供を教へて居る人の話に、東京の子供は田舎の子供に比べると見聞の広い事は非常な者であるが何事をさせても田舎の子よりは鈍で不器用である、たとへば半紙で帳面^とを綴^とぢさせて見るに高等科の生徒でありながら殆ど満足に綴^とぢ得る者はない。これには種々な原因もあらうが総ての事が発達して居る東京の事であるから百事それぞれの機関が備つて居て、田舎のやうに一人で何も彼もやるといふやうな仕組でないのもその一原因であらう、これは子供の事ではないが余は東京に来て東京の女が魚の料理を為し得ざるを見て驚いた、けれども東京では魚屋が魚の料理をする事になつて居るからそれで済んで行く、済んで行くから料理法は知らぬのである、云々との話であつた。道理のある話でよほど面白い。自分も田舎に住んだ年よりは東京に住んだ年の方が多くなつたので大分東京じみて来て田舎の事を忘れたが、なるほど考へて見ると田舎には何でも一家の内^{うち}でやるから雅趣のあることが多い。洗濯は勿論、著物^{きもの}も縫^はつ、機^{はた}も織^うる、糸も引^ひく、明日^{あした}は氏神^{うぢがみ}のお祭^{まつり}ぢやといふので女が出刃庖丁^{あざと}を荒砥^{いささ}にかけて聊^{たい}か買^うふてある鯛^{うろこ}の鱗^{はらわた}を引いたり腹綿^{はらわた}をつかみ出したりする様は思ひ出して見るほど面白い。しかし田舎も段々東京化するから仕方がない。

(五月二十八日)

3. その先生のまたいふには、田舎の子供は男女に限らず唱歌とか体操とかいふ課をいやがるくせがあるに東京の子供は唱歌体操などを好む傾きがある、といふ事であつた。これらも実に善^とく都鄙^{とひ}の

特色をあらはして居る。東京の子は活潑でおてんばで陽気な事を好み田舎の子は陰気でおとなしくてはでな事をはづかしがるといふ反対の性質が既に萌芽ほうがを発して居る。かういふ風であるから大人に成つて後東京の者は愛嬌あいきょうがあつてつき合ひやすく何事にもさかしく気がきいて居るのに反して田舎の者は甚だどんくさいけれどしかし国家の大事とか一世の大事業といふ事になるとかへつて田舎の者に先鞭せんべんをつけられ東京ツ子はむなしくその後塵こうじんを望む事が多い。一得一失。

(五月二十九日)

4. 東京に生れた女で四十にも成つて浅草の観音様を知らんといふのがある。嵐雪らんせつの句に

五十にて四谷を見たり花の春

といふのがあるから嵐雪も五十で初めて四谷を見たのかも知れない。これも四十位になる東京の女に余がたけのこ筍の話をしたらその女は驚いて、筍が竹になるのですかと不思議さうにいふて居た。この女は筍も竹も知つて居ただけけれど二つの者が同じものであるといふ事を知らなかつたのである。しかしこの女らは無智文盲だから特にかうであると思ふ人も多いであらうが決してさういふわけではない。余がそうせき漱石と共に高等中学に居た頃漱石の内をおとづれた。漱石の内は牛込うしごめの喜久井町きくいちようで田圃たんぼから一丁か二丁しかへだたつてゐない処である。漱石は子供の時からそこに成長したのだ。余は漱石と二人田圃を散歩して早稲田から関口の方へ往たが大方六月頃の事であつたらう、そこらの水田に植ゑられたばかりの苗がそよいで居るのは誠に善い心持であつた。この時余が驚いた事は、漱石は、我々が平生喰ふ所の米はこの苗の実である事を知らなかつたといふ事である。都人士とじんしの菽しゆくばく麦まいを弁みやこぜざる事は往々この類である。もし都みやこの人が一匹の人間にならうといふのはどうしても一度は鄙住居ひなずまいをせねばならぬ。

(五月三十日)

P131 ~ P133

[コメント]

正岡子規晩年の四大随筆で、松蘿玉液に続いて書かれたもの。地方の子と都会の子の話などは面白いことこの上なし。痛みで苦しみながらこれほど自由な発想があるものかと感激する文章ばかり。

- 2010年1月3日 林明夫記 -